

極 東 蠍 *

高 島 春 雄

東京文理科大學動物學教室

昭和19年5月北海道帝大内田亨教授からサソリ標品1瓶の御惠投を忝くした。之等は北支の河北省滿城で昭和17年6~7月の交今村泰二氏の採集にかゝるものである。御提供下さつた内田教授の御厚志に深謝する。之等は何れもキョクトウサソリ *Buthus martensii* Karsch, 1879 である。本種の隸するキョクトウサソリ属 *Buthus* Leach (1815) は *Buthus occitanus* (Amoreux, 1789) (sub: *Scorpio*) を模式種とし57種程あり、*Buthus* (s.str.), *Prionurus*, *Hottentotta* の3亞属に分たれる。キョクトウサソリは初出の亞属に入る。キョクトウサソリ属の標徴は次の如くに敘することが出来る。胴部は上面に明瞭な畝があり、背甲は大抵顆粒列より成る明瞭な畝を具へる。大腿の不動鉗技下縁には2齒がある。觸鬚の指の斜行列は外側基部に1~2の側顆粒を具へる。第3、第4両歩脚には跖距がある。尾節は全節下面に明瞭な畝を見る。毒針の下方には全く刺を缺くか瘤狀の1刺を有するのみ。属の分布地域は地中海沿岸地方、印度、馬來半島、支那、滿洲、蒙古、それからエチオピア區では Zambesi 地方まである。次にキョクトウサソリは既に前稿「日本産全蝎目及脚鬚目」中に山西省産成雌に就き記載したからこゝには再説しない。

今回の標品は37頭で頭胴長11耗から32耗に及ぶ亞成體及び成體ばかりである。随つて性別はた易くて12♂♂25♀♀たるを知る。採集者は恐らく手當り次第に採つたものであらうから今回は性比は'大體 ♀ 2 ♂ 1 である。頭胴長(背甲長と

* 東亞産全蝎類脚鬚類の調査 (其の十五)

前腹長との合長)は♂11~23耗, ♀17.5~32耗で♂は23耗以下, ♀は23耗以上のものが多い。尾長(後腹長)の計測値には色々誤差もは入つて來て居るが♂では多くは28~31耗, ♀では多くは29~33耗で之は殆ど差異を示さぬ。併し尾長と頭胴長との比をとると明かに♂は♀に勝つて居る。それに雌は雄より肥大して居るから軌範的の雄と雌とを並べたら“全體の感じ”から性を識別し得るのである。併し實際問題としてさういふ都合の好い場合は寧ろ少いから、もつと便利な性徴で把握したいものである。近年岸田久吉氏(1939)、沖波實氏(1939)は夫々獨立に本種の二次性徴に就き報告された。共に行届いた觀察で両氏に對し敬意を捧げるものである。私は從來の經驗から頭胴長11耗位になれば二次性徴を具現するものと考へる。即ち觸鬚の鉗による時は雌雄何れなりやを知るのは殆ど百發百中である。即ち♀では先づ尋常であるが♂では指の始部に近く膨出と陷凹が明である。11耗位に達せぬ幼體ではどうかと申すに其の場合は橈狀器の齒數で決定せらるべきであらう。齒數は屢々二次性徴となる(さうでない例はマダラサソリ)。今回のものでは♂で22~24枚(22~23枚のものが多い)、♀で17~21枚(19~20枚のものが多い)で♀に於て大體20枚どまり、♂に於て22枚以上といふのは前稿「山西省産全蝎目」に示した通りである。山下博三氏採集の山西省産♀(頭胴長23、尾長29.5、橈狀器齒數右18枚左19枚)で18頭の幼生を擔つて居るのがあつた。其等は頭胴長5耗から7.5耗に及ぶものでとても二次性徴は現れて居ない筈なのに、橈狀器齒數を調べるに20枚までと22枚以上と劃然と分れて居て、恐らく10頭は♂、8頭は♀であるであらう(多少の狂ひは勿論あらう。成雌で左右共24枚といふ特例に遭遇して居るから)。以上からして私は雌雄を外見上識別する最も便利な手懸りは橈狀器齒數及び鉗の形狀であると考へる。性屏は大抵の♀では左右2枚が癒合して居るが、さうでない(即ち兩半が廣く隔たり一見雄然たる)例にも稀には遭遇するから多少不安である。橈狀器は成體では♂が大きく5.5~6耗で♀は體長同長が或はそれ以上のものでも5耗位である(此の僅かの差も勘でわかるやうになる)。

側眼異常のものは山西省産を検した時にも経験したが、今回も1♀に於て左側眼丘に3眼あるが上方のものは他の2眼よりずつと小さく、更に右側眼丘には2眼しかないのを見つけた。

本種の産地として臺灣を挙げないほうが良いことは既に何回か誌して來た通りである。南支福建省に居るのも本來の自生者ではないかも知れぬ。それは「本草綱目」に蝎は青州（山東省）の山中の石下に見られる、江南にはもとは居なかつたのだが唐の開元の頃から往々見かけるやうになつた、東方に産するのである、といふ意味の記述からも推測されるのである（開元は玄宗皇帝の御代で我が奈良朝の頃であるから相當古い）。想ふに本種は北方系のもので臺灣や福建省には自生しないと看做すべきであらう。臺灣で著名の標本店の型録などを見るとツクシサソリの名で本種の液浸標品を販賣して居る。それは恐らく北支、滿洲あたりから入手の標品を仕上げたものであらう。産地を書かずに臺北コタヒラ製作所などとラベルに印刷してあるから、うつかりすると臺灣産と誤認する。殊に此の標品が東京の代理店で賣捌かれた時に産地が「臺灣」になる可能性を増して來るのである。心すべきことである。